

なかなか勉強になった。

〔参考文献〕

最上孝敏編『日本民俗学大系』三
「社会と民俗(一)」(昭和三三年)
河岡武春編『講座日本の民俗』五

「マツボリ」と「ヘソクリ」の響き

後藤 重巳

生業 (昭和五五年)
高柳光寿編『角川日本史辞典』(昭和四九年)
(文学部史学科四年)

比較的広い分布を持つ方言に「マツボリ」という語があり、これは「ヘソクリ」などと同義である。

この「マツボリ」の用い方は、たとえば、家庭の主婦が主人に内緒で行商人に小豆などを売り、その代価を貯めておいて、「エプロン」の一枚でも買おうとする時、その様な「ヘソクリ資金」のことを「マツボリ」というのが一般であった。

「ヘソクリ」にしろ、「マツボリ」にしろ、いずれもささやかな蓄財財産であり、これを以て家を建てたなどの話は、寡聞にして耳にしたことはない。

この「マツボリ」の語について、早い時期に関心を示したのは、大分県三重町生まれの経済史学者・小野武夫博士であった。小野博士は、日本古代荘園史から、近世薩摩藩の「門割制度」、さては、近代農村史に

まで、その研究を及ぼされた希有の経済史学者であったが、『日本荘園制史論』をはじめ数十冊に及ぶ編著作の内には、『日本農民史語彙』がある。博士は、本書の項目中に「マツボリ」の一項を設け、その解説として、大意「私の郷土地方では、ヘソクリのことを、マツボリというが、このマツボリは、本来、小規模な新開田畑のことを意味している」との解説を加えられている。

「田地を広めたきは、農民の本意」(「中津藩法令集」)といわれる様に、近世期までの農民は、既存の耕地に隣接した草地や空き地を、銀一本で開発したが、これらの新開地は、ひろく「切り添え」とか「開き」「持ち添え」などと呼ばれた。まさに本田や本畑に「添える」耕地の意を持つが、未公認の場合が少なかつた。猫の頬ほどの開田畑からの収

穫。幕府や藩は農民のこの「余録」的な新開耕地も摘発、これらを「穏田畑」として厳しく取り締まった。「マツボリ」の語源は、古く中期の文書史料に散見する「町堀」の字にあるらしい。「町堀」の字は当時、字面どおり「マチホリ」もしくは「マチボリ」と訓まれていたものと考えられる。

「ヘソクリ」の語については、『広辞苑』には、「へそくりがねの略」とあり、「へそ」については、「臍」とともに、「綜麻・卷子」を掲げ、「つむいだ糸をつないで、環状に幾重にも巻いたもの」と説明し、『へそくりがねは、綜麻を繰ってためた金銭の意で、これを「臍」と混用。主婦などが儉約して内緒でためた金ほそくりがね』と述べている。いずれにしろ、一挙に得た大金の意ではなく、これも細々と、しかも、こっそりと貯めた財産を意味しているらしい。

「マチボリ」が転じたと考えられる「マツボリ」は、もともと農民の隠匿的な耕地を意味していたが、次第にその用法が拡大され、耕地以外の物品にまでもちいられるようになる。貨幣経済の普及した近世期以降には、ついに金銭のみに限定されるように考えられたが、民俗事例でまだ土地財産を示す例が少なくない。

つまり「マツボリ」は、黙認こそされ、決して公認された財産ではなかった。従って領主・主人や他人に発見されれば没収・横取りされても私有を強調できない、所有権の衰しい弱さを持っていた。そこには、封建的な土地財産制度の片鱗がのぞいてると云えよう。「マツボリ」と「ヘソクリ」の語の響きに、何か秘密めいたものがあるのは、歴史的所以であろうか。(文学部教授)

編集後期

若葉薫る五月、校正終了。爽やかな気持ちで一杯。今はパソコンで自由に割付けできるようになった。ソフトの進歩には目を見張るものがある。だが相変わらず操作の方はとまどうことしばしば。結局、四十代はメカに弱い世代ということか。竹田高校民俗部の力作を特別に寄稿していただいた。感謝。(森)

『国史纂集』 第十六号
一九九一年五月十五日発行
編集 後藤 重巳
森 猛
発行所 別府大学日本史研究室
千八七四 別府市北石垣八二